記の研究、特に文學研究の基礎作業としては、その形式的分類よりも一層に內容的考察が必要であり、その點著者が平安時代の主なる私日記の數種に就いて內容を紹介せられたことは、一般讀者の爲の列擧とは云ひ乍ら意味を有する筈であるし、また歌合等の日記について原本との校訂を經た本文を收錄せられた如きは、やがて著者の研究目的に適切な回答を與へるであらう。

最後に第三編「皇國日記年表略」は支那日記年表と併せて本書の特徵となし得よう。これは室町時代の日記が有する意義を看却し皇紀二千年の如き研究上には無意味な下限を求められた點を重大なる缺陷としても、なほ今後の日記研究に相當の利用的價値を保つと思ふ。それはともあれこの著者がいはゞ門外といふべきかゝる尨大な基礎作業を企てられた熱意に對して、私は深甚なる敬意を表し、その上に立脚する「日記文學研究」の出版を鶴首して期待するものである。（A5版八〇三頁、昭和二十年六月目黑書店發行、定價貳拾圓）〔林屋辰三郎〕

ビスマルクの外交　時野谷常三郎著

故時野谷博士が逝去されて早くも四春秋を閱した。此の間祖國を戰禍の巷に化せしめた戰亂は學術研究さへ窒息させんとするに到つたが、戰が無慘な敗戰に終つた今日、こゝに故博士の學位論文が一卷に纏められて上梓されたるを見、感慨を新にする者唯に博士の講筵に連り博士の謦咳に接するを得た人々のみに留らないであらう。本書に繙きながら、博士最後の講義たる「ビスマルクの文化鬪爭」を聽講した評者の胸奧には、在りし日の博士の悠容迫らざる風貌と其の講義振りとが彷彿として浮び、改めて博士生前の面影を偲び追憶を新たにしたのであつた。

博士が獨逸近世史の大家として令名夙に高く、原博士が本書の序に述べられた如く「就中ビスマルク時代の研究の深い造詣は當代吾國の權威」と謳はれた事は、こゝに縷說するを要せぬ所である。我々は博士生前に於いて多數の述作に接するを得たが、今又博士が畢生の大作として心血を濺がれた學位論文が公開され、一般好學の士の机上に供せられた事は、獨り學界のみならず廣く我國文化の向上に資する所多大なるものありと言ふ可く、此の意味に於いて我々は、戰時下幾多の困難を排して本書の刊行に盡力された原博士に深謝す可きであると共に、原論文に見られた重複を改め用語假名遣ひの統一を圖る等出版の實務を擔當された中山三高教授の勞を大いに多としなければならない。

本書の構成は篇を分つ事六つ。先づ第一篇、ビスマルクの政治思想に於いて、十九世紀の指導的理念たる世界主義と民族主義とを說いて後ビスマルクの政治思想醸成に及ぼせる諸影響を明かにし、第二篇、ビスマルクの獨逸海權確立策と、シレスウヒ・ホルシュタイン問題に對するビスマルクの外交にては、シレスウヒ・ホルシュタイン問題をめぐり獨逸海上發展を圖るビスマルクの外交政策を扱ひ、第三篇、ビアリッツの會合とビスマルクの對佛蘭西政策、第四篇、ビスマルクの對伊太利政策と伊普同盟の成立ではそれぞれ對佛對伊政策を、第五篇、墺佛密約の成立とビスマルクの外交

第六篇、普墺戰役當時に於けるビスマルクの外交にて墺を中心とするビスマルクの外交政策を論じて居る。觀念的に成り勝ちであつた輓近の我が西洋史學界に在り正統な政治史の本格的研究に終始された博士の堅實にして重厚な史風は、おのづから本書の行間に滲み出て居り、篇を章に章を節に分つた緻密な內容目次を一見しても、巨石を以て疊み上げた建築物を思ばしめるものがある。ビスマルク一代の外交政策を指導せる三大方針は實際的政略の勵行と小獨逸主義の達成の兩者にありとする結論は、一見平凡自明の如く思はれるが、此の結論に達する爲、七百頁に垂んとする浩瀚な本書を埋め盡くして根本史料に卽しつゝあらゆる面からの檢討推究を加へて剩す所のない博士の研究方法は、史學研究の本道を明示して後進へのこよなき指針となるであらうと共に、他面において本書が、國際外交に對する理解の極めて乏しい我國朝野の蒙を啓くに役立つ事多大なるを信じ、一般人士の熟讀を希求して已まない次第である。（大八洲出版株式會社發行　定價貳拾參圓）

（兼岩正夫）

啓蒙史學の研究　第一部　概論篇　千代田　謙著

さきに『西洋近世史學史序說』を公刊された廣島文理科大學の千代田博士は、その後戰時中を通じ依然默々として眞摯な學術的研究を續けられ、今日その續篇たる啓蒙期の史學に關する大著を發表された。戰時中世を風靡した曲學阿世の大勢にも拘らず、敢然として自己の學的探究を遂行された博士の態度こそ、まさにその學者的良心の純潔性を示すものであり、その成果が一千頁に近い大著として公刊され本邦西洋史學史研究上、一大記念碑の樹立をみるに至つたことは、誠に當然と云はねばならない。

千代田博士は本書の第一篇（緒論）において先づ啓蒙史學の研究に對する根本的な立場を明にされる。卽ち從來の十九世紀的立場に關して批判反省を加へ、又、史學史を精神史的立場より考察すべきことを强調される。次いで啓蒙精神と啓蒙史學との關聯を英、佛、獨各國の特殊性を中心に考慮しつゝ論ぜられ、「かくの如く、時代的國民的特色を呈するものとして啓蒙史學思想は了解せられると共に、各史的思想に樣式化せられたる個人的、また各各の時・處的なる特色が錯綜して、無限多樣のニュアンスを浮かべる。啓蒙史學の共通的・類似的性格と、個別的・相異的風采とを頗を懷れず、いささか追體驗的に味得せん」と試みられるのが本書の主目標なのである。

以下博士は第二篇（佛蘭西啓蒙史學）においてはヴォルテールを中心に、モンテスキュウ、百科全書家、テュルゴー、ルソー、レイナール、ヴォルネイ、コンドルセー等について、佛蘭西における啓蒙史學の主潮をあとづけられ、第三篇（英國啓蒙史學）ではヒュームを中心に、ボーリングブローク、ロバートソン、ファーガソン、ギボン等について詳述され、第四篇（獨逸啓蒙史學）にあつては、フリードリヒ二世の史學を遠望しつゝ、イゼーリン、ウェーゲリン、ウィンケルマン、メーゼル、ヘルデル等に論及される。

かく佛英獨の各啓蒙史學について、精密に考究された後、第五